

‘You’ve come a long way’ — 橋本萬太郎さんのこと —

国 広 哲 弥

今から十数年前、まだ東大に在職していた頃の話である。ある時旧知のアメリカの言語学者 Charles Fillmore さんが何かの用事で日本にやってきた。かつて神田外語大の学長であった井上和子先生と私に会いたいということで、私の研究室に三人が集まった。その時にフィルモアさんが盛んに話してくれたことは、‘risk’ という動詞のコーパス言語学的な分析のこと、亡くなる直前の橋本萬太郎さんを見舞った時の話であった。‘risk’ の話はその時はよく分からなかったが、のちに論文の形で発表され、その論文は神大の大学院で読んだ。その研究成果は、私が編集に参加したある英和辞典の中にしっかりと取り入れてある。

フィルモアさんの来訪の少し前に橋本萬太郎さんは胃がんのために五十台という若さで亡くなっていた。萬太郎さんと私は共通の師である服部四郎先生を通じて若い頃から知り合いであったが、同世代の言語学者の中で萬太郎さんは私のもっとも尊敬する人である。碩学で独創的、私など足元にも及ばないと言うもおこがましいほどである。この国際的な大言語学者を余りにも早く失ってしまったことは、日本の、否世界の言語学界の一大痛恨事であると言わねばならない。最近、萬太郎さんの論文集が出版されることを知り、さもありなんと喜んでいる。

さて、フィルモアさんと萬太郎さんはオハイオ州立大学時代以来の親友であった。萬太郎さんが余命幾ばくも無いと聞いてフィルモアさんはアメリカから見舞いに駆けつけた。その時萬太郎さんは、

‘You’ve come a long way.’

と言ったと、フィルモアさんは繰り返し語った。私も井上先生もただ黙して聞くのみであった。こ

れからは私の無知をさらけ出す話になるのであるが、これを聞いた時、「遠いところをはるばるよく来てくれたね」という文字通りの意味にとって、それ以上のことは考えなかった。しかし今にしてみると、ひょっとすると二人の親友はこの言葉に何かほかのニュアンスを込めていたのではないかという疑問が生じるのである。それというのも、ある日『小学館ランダムハウス英和大辞典第二版』の ‘way’ の項を見ていたら、イディオムとして ‘You’ve come a long way.’ という句が出ていて、これは「君は大物になった」という意味であり、アメリカのタバコ Virginia Slims の標語であると説明してあったのである。フィルモアさんが私たちの前で何度も感慨深げにこの言葉を繰り返していた時、萬太郎さんはこの裏の意味を込めていたのだということを匂わせていたのではないだろうかと思うわけである。私たちもその事に気付いて、何らかの反応を示すべきではなかっただろうか、自分の無知を恥じている。今度フィルモアさんに会ったら尋ねてみたいと思っている。

橋本萬太郎さんの独創的な碩学ぶりは、その著書『言語類型地理論』（弘文堂）と『現代博言学—言語研究の最前線—』（大修館書店）を読めば分る。私は年来、一度読んだ本は再読しない人間なのであるが、この『現代博言学』だけは例外で、いつも暇があったら再読したいと狙っている。そこに見られる考察のしかた、博読に基づく思いもかけない情報の提供などの研究態度・方法が魅力的である。萬太郎さんは、若い頃、魯迅のような口ひげを生やしていたが、これも魅力的であった。口ひげの似合う日本人というのは非常に少ないが、萬太郎さんは例外的な存在であった。

.....

.....

直説法によるヒンディー語授業の体験

浅 山 佳 郎

1999年9月から11月まで、インドのムンバイにある印日協会日本語学校の日本語教師であるアグボートワラ・マイトリーさんが神奈川大学の日本語教員養成課程に研修生として来られた。彼女のすぐれた日本語能力やその研修結果についてはおいておいて、ここでは、彼女に頼んで行ってもらった「ヒンディー語授業」について、参加した学生からの報告を交えて、記したいと思う。

第2言語としての日本語の教育について学ぶのが、日本語教員養成課程の目的である。毎年数名の修了生が実際に日本語教師となる。ところで、母語話者による日本語教育は、他の多くの言語教育と同様、直説法をとる。ここで「直説法」というのは、H.PalmerのOral-Aural Approachのような、今世紀初めに提唱されたいわゆるDirect Methodを限定的に指すのではなく、日本語によって日本語を教えること全体を指して言うことにする。

我々の第2言語教育への印象は、中学校での英語教育の経験に基づくことが多い。そこでは日本語、つまり学習者の母語によって英語が教えられる。そのことの是非は別にして、いっぽうで、神奈川大学の日本語教員養成課程を修了して海外で日本語教師となる卒業生の大半は、その任地の言葉はある程度学習してから行くものの、日本語だけで授業を行うことが多い。

つまり、自分は母語で第2言語を教えられた経験しかない日本語教師が、学習言語となる日本語でその日本語を教えるのである。次のような疑問が浮かぶ。全く知らない言語を学ぶ手段としてその言語自体が用いられていても人は言葉を学べるのか、そうやって行う最初の授業で全く知らない言語はどんなふうに聞こえるのか、授業が理解され学習が進むためには目標言語をどれくらい使ってもかまわないのか、などなどである。

そこで、そうした経験とするため、マイトリーさんをお願いしてヒンディー語によるヒンディー語の初級の授業を行ってもらった。日本語教員養成課程で学ぶ学生にこの予定を話したところ、10名以上の学生が参加した。時間の都合でわずか2回しか開けなかったが、ほとんどの学生にとって見るのも聞くのもはじめてというヒンディー語の授業は、「直説法」による第2言語教育が、どのような印象のものなのかをつかむ、またとない機

会になったようである。

以下は、参加者の1人である英語英文学科の3年生が記した感想である。

「マイトリーさんのヒンディー語講座を受けて」

若松 智美

インドから来られたマイトリーさんの暇を見て行われたヒンディー語講座に参加した。

これは直説法で行われた。私はこれまで直説法によりまったく触れたことのない言語を教わるのは初めてであった。そのため先生の言っていることがわかるかどうか不安であった。しかし、先生の発するヒンディー語は限られており、人名の呼び方、我々がこれから習う単語、質問のために必要な語などであった。その他に言いたいことは、ジェスチャーを用いられた。

そのおかげで、終始楽しいヒンディー語講座を受けることができた。マイトリーさんは、カードにヒンディー語の単語をカタカナで書いて、我々に示し、それを使って簡単な文を口頭で練習させた。私が学んだヒンディー語は次のようなものである。

メラ ナム ワカマツ ジ。

私の名前は若松です。

アプ テイク ヘ、ーハ メイ テイク フ。

お元気ですか。ーはい元気です。

メイ ヒンディバシャ キ アディヤピカ ホ。

私はヒンディー語の先生です。

また、ヒンディー語に用いられる文字の綴りも習ったが、非常に困難に思えた。音声として覚えるのは簡単なようだが、綴りまで覚えるとなるとかなりの時間と労力がかかりそうである。

授業ではマイトリーさんは、カタカナを発音記号として用いた。アルファベットでもかまわないところであるが、学習者の便を考慮のことだったと思う。そのようにして提示された単語を使って、基本的な名詞述語文（「AはBデアル」という意味の文）の練習が行われた。ヒンディー語の名詞には性の別があるが、それによって名詞述語文を作る述語（繫辞または判定詞などの役割をはたす語）の形が変わることなど、言葉によって説明しなければ難しいのではないと思われるようなことも、ヒンディー語だけで繰り返し例文を提示することによって十分伝わることを経験できた。

性による属格表示の区別が分かった時には、クラス全体に「ああそうだったのか」という意味のため息が響いた。この授業は、日本語教師となっ

た時に、無形のしかし確実な経験となるだろうと考える。

学生による授業評価

国 広 哲 弥

私が今年度担当した授業の中に「英語学演習Ⅴ」というのがあり、テキストとして R. L. Trask, *Language: the Basics* (second edition, 1999, Routledge) を用いた。今年度で定年になるので、神大在職の締めくくりとして、その最後の授業の時に学生に私の授業の評価をしてもらった。もちろん無記名である。今までの風評では私は厳しい先生ということになっているらしいので、どのような拒否的な反応が出るかなかなか覚悟していたのであるが、結果として、大多数の学生が満足してくれていることが分かり、ほっと胸をなで下ろしている。一般に学生による授業評価が歓迎されないのは、マイナスの評価を恐れてのことであると思われるが、案外そうでもないようである。私に対する評価の内容を記すことは、ほかの先生方のご参考になる面があると思うので、自慢に響くのを顧みずに述べてみる。

まずテキストはとても面白かったという学生が多かった。この初版を実は数年前に別の授業で使ってみて、私自身とても気に入っていたのである。別の大学でも使ったが、やはり好評であった。言語学入門の一つであるが、核心的な部分を分かりやすく、かつ興味深く説いていて、類書の中では出色のものであると思う。特に手話の最近の研究に基づいて人間の言語能力は遺伝的に持って生ま

れたものであることを説得的に説いている「子供と言語」の章は圧巻である。

私の授業の仕方は厳しくはあったが、最後になってみるとお陰で実力が付いてよく読めるようになり、感謝しているという評が多かった、自慢げに響くのを厭わずに言うと、大学に来て私のような授業に出会ったのは初めてであり、同じような授業をする先生は神大にはほかに一人もいらっやらないという。それでそれがどういう授業であったのか、ご参考のために記してみたい。

まず学期初めに受講生のリストを作って配布する。このリスト順に指名して音読して訳させる。学生は指名順があらかじめ分かっているのはとても有難いことであったと言う。学生が訳したあと、私がもう一度説明を加えながら訳し直す。この時、学生の不適切な訳を一つ一つ取り上げて直して行くという方法を取る。これが学生には好評であった。これでとてもよく理解できたと言う。その時に誤訳と適訳の意味のずれを詳しく説明する。例えば、英語では同じく ‘young’ でも「若い」は大人にしか使えず、子供には「幼い」を使わなければならないといった類である。

学生の「先生が定年で去って行かれるのは残念です」という言葉を読んで、私のささやかな労も報いられたと感慨ひとしおである。

共同研究「古代中国語の敬語に関する社会言語学的研究」経過報告

彭 国 躍

研究目的：

『礼記』には「天子死日崩、諸侯日薨、大夫日卒、士日不禄、庶人日死（天子の死去を崩と称し、諸侯には薨、大夫には卒、士には不禄、庶人には死と称する）」という記述がある。これは古代中国語において、「死」という概念を表す言葉が社会

的身分の違いによって表現し分けられていたことを示している。この記述は古代中国語の社会的属性の一例として多くの文献に引用されている。しかし、礼にかなう行動規範を示すことを目的とする『礼記』という書物の性格を考えれば、この記述をそのまま古代中国語の運用事実そのものとし

て理解するには、まだ証拠不十分といわざるを得ない。『礼記』の記述の真実性を検証するために、古代中国語における「死」に関するさまざまな表現の運用実態を調べる必要がある。したがって、今回は『礼記』とほぼ同時代のテキスト『史記』の言語資料を使って「死」の表現異形とその社会的属性について考察する。

進行状況：

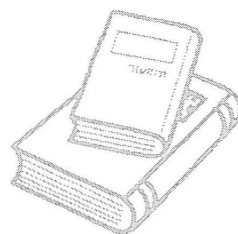
- ① 『史記』の版本調査はすでに終了した。『史記』は現在いくつもの版本が残っているが、本研究は、清朝金陵局本を定本とした中華書局本を調査の対象とする。このテキストは130巻の完全版として現在もっとも広く受け入れられている。
- ② 『史記』に使われた「死」の形態と出現数の調査も終わった。結果は次の通りである。
一字：卒(1034)、死(941)、崩(220)、薨(181)、亡(14)、終(10)、没(10)、故(6)、夭(3)、歿(2)、喪(2)、償(1)、隕(1)、賁(1)
二字：百歳(5)、没世(3)、物故(2)、寿終(2)、

千秋(2)、万歳(2)、没齒(1)、塋身(1)、万世(1)、棄捐(1)

三字：棄群臣(2)、填溝壑(2)、捐館舍(2)、天年終(2)、山陵崩(1)、捐賓客(1)、不立朝(1)

四字：宮車晏駕(6)、千秋万歳(3)、登仙于天(2)、天子下席(1)、天年下世(1)、天崩地坼(1)

- ③ 今後の研究方向として、これらの表現が使われた人物の身分、年齢、性別などの社会的属性を調べ、それと表現異形との間に現れた相関関係を分析していく。



共同研究「初級フランス語教科書の研究および作成」経過報告

佐 藤 夏 生 ・ 西 野 清 治

この共同研究は、初級フランス語教科書を作成することと、教科書に含まれる語彙の研究という2つの部分からなる。まず、教科書の作成は本学の専任教員2名に加え、非常勤講師2名(うち1名はネイティブスピーカー)の助けを借りて進められている。当初は、フランスの文化や風土を紹介することにより大学生にとって多少なりとも読んでおもしろいようなテキストを含んだ文法読本を作ろうと考えていた。しかしあるとき、教科書関係に通じておられる田島宏先生という方から助言を受けたのをきっかけに、コミュニケーションを中心にしたものを作る方へと方向転換した。初級のクラスは2種類あるので、教科書も2種類作ることにした。一方はコミュニケーション表現クラスで使うものであり、もう一方はコミュニケーション理解クラスで用いる予定のものである。前者も後者もダイアログを中心に構成される。前者では口頭でのやりとりの練習問題が付加されている。後者では、やはり最低限の文法を学ぶ必要はあるので、文法的な説明も加えられるが、練習問題はで

きるだけ質問—返答形式のものにする予定である。現在は、来年度前期の授業で使う部分の完成を急いでいるところである。年明けからは、残りの部分の作成にとりかからないと後期に間に合わないというような状況である。ちなみに、こうして作られた教科書は生協で製本してもらったものを授業で使いながら修正していくつもりである。

次に教科書の語彙に関する研究では、対象を動詞だけにしほり、動詞句の一部として現れるものの出現回数を調べている。今のところ、調べ終わったのは、野村二郎「パリ一周12課」だけである。この教科書の中で出た動詞の種類は173種類で、出現回数の多い上位5つは、1位 être(です、いる、ある)236回、2位 avoir(持つ)115回、3位 aller(行く)65回、4位 aimer(愛する)29回、4位 parler(話す)29回、である。今後、あと何冊かについて同様に調べ、日常使われる頻度の高いとされている動詞の扱われ方、あるいは個々の教科書の性質と動詞の出現状況との関係などについて考える予定である。

共同研究「ロシア語教育における語彙と文法」経過報告

堤 正 典

大学における教養外国語としてのロシア語教育を見直し、現代日本人が学びやすい教育内容・教材の検討を行うのが、この研究の目的である。まず現在検討すべき課題として、本学で開講されている「ロシア語初級」程度の入門段階で、導入すべき語彙と文法の検討を行っている。

ロシア語は語形変化が豊富な言語であり、入門段階においても様々な語形変化を記憶することが必要になる。語形変化にも頻度が高いものと低いものがあり、当然頻度が高いものから記憶すべきである。例えば、ロシア語の形容詞（長語尾形）の変化には全部で6つのパターンがある。基本的な2つとそのバリエーション4つと考えることができる。しかし、基本的なパターン2つのうち、片方の変化パターンの形容詞は、入門段階に学習すべき語の中には非常に少数である。したがって、基本的パターンであるとしても、それを第一に学習者に導入する必要はなく、形容詞変化パターン

の導入にはこのあたりのことを反映したものにすべきである。このような問題がロシア語文法の至るところに見受けられる。

入門段階で導入すべき表現も検討が必要である。ロシア語では簡単な表現においても文法事項が関わってくるが、中には語形変化の導入なしに用いられることができるものが、いくつかある。そのようなものからまず導入し、学習者に過度の負担がかからないようにして、ロシア語の有用な表現を覚えていくことも考えられる。

現在、外国語科目においても、本学をはじめ、多くの大学で学期制の導入が検討されていたり、実際に導入されていたりする。しかし、国内のロシア語教育界では、それに向けての議論や、必要な教科書・参考書の編纂が活発に行われているとは言いがたい。本研究はそのような欠落を補い、新しい視点にたつロシア語教材の開発に取り組もうとするものである。

言語研究センターの多言語化を

石 井 陽 一

日本では英語さえ出来れば世界を闊歩できるという思い込みが強い。英語の万国通用性の信仰は当の英米人より強いと思う。これが必ずしも当を得ていないことは、ヨーロッパやラテンアメリカを一寸旅行してみればわかるはずなのだが…。確かに国際貿易の一連の荷為替書類には世界的に英語が使われる。しかしすべての国際取引がそうであるわけではない。たとえば海外子会社の運営には現地語を欠かせない。しかし、それすらも、英語の出来る現地職員を通訳に雇い、その地の英字新聞で情報を取ればよいと多寡をくくる傾向がある。しかしそれでは相手の本当のところはわからない。また日本人の英語依存症が反感を招く。

海外取引ばかりでなく、少子化時代の副作用として、日本では遠からず若手労働力の補完として特殊語学国からの外国人労働者の導入を余儀なくされることは目に見えている。国内で人を使うことにも特殊語学が必要になる。また、人が来れば

犯罪も起こる。今でもタイ語、アラビア語、ペルシャ語、タガログ語などの司法通訳が不足しているのは周知の通りである。

早稲田大学の言語教育研究所、慶応大学の言語文化研究所には、これらの特殊語学の講座があって、何学部の学生でもそこでとった単位が卒業単位に算入される。本学の本センターにも特殊語学の講座を設けられ、そこでとった単位を卒業単位に換算するようにしたらよいのではないだろうか。

優先順位としては、タイ語からだと思う。本学は、タマサト大学、マヒドン大学というタイの二大学と協定を結んでいるが、休眠状態になっている。タイ語を設ければ、教員の招聘、学生の短期または長期の派遣も可能になり、眠れる協定を呼び覚ますことも出来る訳だ。そういうメリットもある。海外協定校は、ただ The Way に列挙すればよいと言うものではない。